

③ ぜんすけ少年と 水トンネル

「おじいちゃん、きょうも また、昔むかしのお話はなし きかせてよ。」

「そうだな、きょうは、なかへち町ちやうの『ぜんすけ少年しょうねんと水トンネルみず』という、めいじのころの話をしてあげよう。」

いまから ずいぶんまえのころのこと、ちかつゆ村むらのかわさきというあたりは、田たに水を入れるのにとてもくろうし、村人むらびとたちはたいへんこまっていた。

ちやうど、そのころ、「水みずばん」をしていた「くぼ えんごろう」という人ひとがいました。えんごろうさんは、「たんぼに、もつ

と　らくに　水を　ひく　ほうほうは　ないものか。」と、まいにちのように　かんがえていました。

そんな　ある日の　こと、「そうだ、あそこに、ずいどう（水トンネル）を　ほろう！」と　けっしんをし、さっそく　かたいいわを五十メートルほど　手で　ほりぬく　たいへんな　しごとに　とりかかりました。

トン　チン　トン　チン　カーン　カーン……

ちびたノミと　ツチで　ほって　いきましたが、いわは　かたくなかなか　おもうように　すすみません。それでも　えんごろうさんは、まいにち　まいにち　ほりつづけました。カーン　カーン　カーン……

「ぼくも　手^てつだうよ。おとうさん！」

くろうしながら ほりつづけている おとうさんを 見ていた
ぜんすけ少年も、いっしょに てつだうことになりました。

ガラガラ ガラガラガラ ドシャー……

えんごろうさんの くだいた いわや いしを ちいさな はこ
に 入れて そとに はこびだす、それは それは たいへんな
手つだいです。

あついい日も かぜの つよい日も、ぜんすけ少年は いっしょう
けんめい おとうさんを たすけました。よるも ほりつづけまし
た。でんきなど ありません。うすぐらい ランプを ともして
ほりつづけました。いわや いしを くだくのですから、ちいさな
こなが 目には いらいます。そんなときは、きものの そで口を
ツバで ぬらして とりだしました。雨あめの日も、つめたい 雪ゆきの

日も……

カーン チン トーン チン

それから なんかげつか ほりつづけた あるひのこと。ぜんす
け少年の 耳みみに、おとうさんの ふりおろす ノミと ツチの お
とが、いつもより 大きおおく きこえてくるではありませんか。

「あつ、もうすこしで ほりぬけるかも しれないぞ。」と、おもつ
たとき、「ゴーツ」と、大きな おとがして、いわが くずれおち、
あかるい ひかりが さーと さしこんできました。

「ああ、おとうさん、おとうさん、ついに ほれたねえ！」

「おおつ、ぜんすけ、ついに ほりぬいたぞ！」

二人は、だきあって、

「これで かわさきの たんぼに、らくに 水が ひけるぞ。はや
く 村の みんなに しらせて こよう。」
と、いって よろこびあいました。
いつまでも、いつまでも……。

「おじいさん、その 水トンネルは いまでも つかっている
の？」

「ああ、そうだよ。いまでも どんどん きれいな 水を 田に
おくりつづけているんだよ。」

「うあー、よかった。いまでも つかっているなんて……。

それに それに ぜんすけ少年って……！」